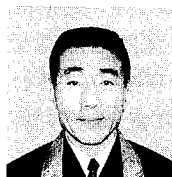


## 最初と最後を味わう

中央仏教学院講師 清岡隆文



仏教の経典は釈尊によって説かれたものです。しかし釈尊と、わたしたちが言うときは、さとりをひらかれた仏陀としての説法ですから経の題目に「仏説」としめされているのです。つづく内容については序分、正宗分、流通分と、古来、分けられています。序分とはその経が説かれるにいた

たった事情を述べ、正宗分は経の中で主要な内容が示され、流通分はその経を広く伝えることをすすめています。浄土真宗でよりどころとする「浄土三部経」はいずれも「如是」と「我聞」ではじまっています。それは仏陀によって説かれたもので、仏弟子が決して私見を入れていないことを明らかにしているのです。そこには釈尊に対する尊敬と信順の姿勢が伝わってきます。わたしたちが経典に接する心持ちも、これと同じでなければなりません。「如是」について親鸞聖人は『教行信証』で、

三経の大綱、顕彰隠密の義ありといへども、信心を彰して能入とす。

ゆえに経の始めに「如是」と称す。「如是」の義はすなはちよく信ずる相なり。(『註釈版聖典』398頁)

と述べておられます。またそれに続く「一時」は「ひととき」と示されていて、ある時とか、かつての意味です。釈尊の説法は直接には、その時に集まっていた仏弟子にむかってなされていましたが、同時に未来の人々にむかってのものでもありました。そのことを格別に実感できたのがインドの仏跡参拝の旅においてでありました。霊鷲山での「讚仏偈」、祇園精舎での『阿弥陀経』は、読誦する者がそのまま釈尊の、この説法に今、遇っているという喜びにひたることになりました。このことがあって経典の最後の流通分に特に注目しています。『阿弥陀経』においては、その部分は、「仏、この経を説きたまふこと已りて、舍利弗<sup>おほ</sup>およびもろもろの比丘、一切世間の天・人・阿修羅等、仏の所説を聞きたてまつりて、歡喜し信受して、礼をなして去りにき」とあります。釈尊はこうしてこの説法を終わられた。ここに舍利弗をはじめもろもろの方々は、この教えによって身も心も歡喜に満ち、深く信じて心にとどめ、うやうやしく礼拝して立ち去った、というのです。これは『無量寿経』や『觀無量寿経』の流通分に比して短文で不十分のようにみえますが、そうではありません。お法に遇えた感動こそが、伝え広がっていく原動力となるのです。経典を読誦するうえで序分や流通分にも注目し、こころをこめていただきたいと思っています。

(真宗担当)